

国語総合

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を開いてはいけません。
- 2 解答用紙は、この冊子にはさんであります。
- 3 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 4 字数指定のある設問については、句読点・記号等も字数に含めるものとします。
- 5 試験終了後、この問題冊子は回収します。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ハーバード大学教授で記憶研究の世界的^(a) ケンイのダニエル・シャクターには、記憶が思いどおりにならないこと
不思議さについて書いた『なぜ、「あれ」が思い出せなくなるのか』という著作があります。⁽¹⁾ シャクターはその冒頭に
ノーベル賞作家であった川端康成の『弓浦市』^(かほたやすなり ゆみうらし)を引用しています。

主人公の作家のもとを突然訪れてきた女性が自分は三〇年まえのある時期に、九州の「弓浦市」でその作家と^(b)濃密
なつきあいをしていたこと、プロポーズまで受けていたことをこと細かに話します。^(A) 作家は何一つ思い出すこと
ができないためにひどく^(ろうばい)狼狽します。女性が帰ったあと調べてみますと「弓浦市」などという地名は地図には載ってい
ませんでした。^(B) 女性が語った濃密なつきあいのあったという時期には九州に出かけていないことにも気づきま
した。結局、女性の記憶が完全に間違っていたのです。この話を引き合いに出してからシャクターは記憶の不思議さに
ついて心理学の知見をもとに解説を進めていきます。

^(C) シャクターは知らないでしょうが、この『弓浦市』という作品は川端康成自身の一種の「記憶喪失」^(c)の実体
験にもとづいているようです。川端は一六歳の五月に故郷で二週間にわたって祖父の看病をしていましたが、その記憶
がまったくくないというのです。たまたま彼はそのとき日記を付けていて、日記には七五歳の祖父が^(d)衰弱していきよう
すが淡々と書かれていました。そして、この日記を書いてから一〇年後に、それを伯父の家の倉のなかで見つけ、当時
のことをすっかり忘れていた自分に驚いたというのです。その『十六歳の日記』^(e)を掲載した^(f)シヨセキのあとがき
は次のように書かれています。

「ところが私がこの日記を発見した時に、最も不思議に感じたのは、ここに書かれた日々のような生活を、私が微塵^(みじん)
も記憶していないということだった。私が記憶していないとすると、これらの日々は何処^(どこ)へ行ったのだ。どこへ消えた
のだ。私は人間が過去の中へ失って行くものに就いて考えた。しかしとにかく、これらの日々は伯父の倉の^(f)イチグウ
の革のカバンの中に生きていて、今私の記憶に^(よみがえ)蘇った。」(筆者が現代仮名遣いに変更)

私たちがさまざまな方法で自分のなかに苦勞して取り込んだことからの記憶は、時間が経過すると思い出せなくなる
ことが少なくありません。これら忘れてしまった記憶は、川端康成の言うように、いったいどこへ行ってしまったので
しょうか。

ここで最初に考えておきたい重要な点は、私たちがいったい何を根拠にして忘れていると判断するのかということ
です。当然、思い出せないからだと答えるでしょう。けれども、ここでの問題は思い出せないという判断が何を根拠にし
ているのかということです。

ローマ時代末期のキリスト教の最大の神学者であり思想家でもあるアウグスティヌスは、「忘れた」とわかる限り忘
却していかないという忘却のパラドックスを唱えました⁽⁸⁾。まず、アウグスティヌスは一枚の銀貨をなくした女がそれを
探すという例をあげます。その女が自分のなくしたものが何かを記憶していなかったら、それが見つかったとき、なく
したものと同一だどうやって知るのかということです。それに続けて自分自身がものをなくして見つけたという体験を
もとの、他人が「これではないか」とか「あれではないか」と言っても「それは違う」と言えるのは X
というのです。このこと自体は、誰にとっても当たりまえのことで少しも疑問を感じないはず
です。

ところが、アウグスティヌスはさらに論を進めます。私たちが何かのことがらを忘却してしまっ
たときに、先ほどの銀貨の例と同様に、何かを忘れてしまったのに、あることが現れたときに「それではない」「それである」と判断
できるのは、それを覚えていたからであるということです。その一例として、⁽²⁾知人を目のまえにしながらその名前をど
忘れた場合、ほかの名前が心に浮かんでも「それは違う」とすぐにわかるということ
をあげています。こうして、しばらくして思い出せた名前は自分の記憶のなかから出てきたもの
としか考えようがないと言います。つまり「わたしは
ちは、それを忘却したということだけでも知っているかぎり、まだ完全にそのものを忘却したわけ
ではないからである。それゆえ、まったく忘却したものであるなら、わたしは
ちはなくしたものとして探し求めることさえもできないであろう。」
(服部英次郎訳)と結論づけています。

このアウグスティヌスの考え方が正しければ、私たちが思い出すことができない(忘れた)と感じても、そのことが

らは自分では自覚できない心のどこかにあるということになります。

それではいつたい心のどこにあるのでしょうか。アウグステイヌスから時代を進めて一八世紀のドイツにとびましょ。一八世紀のドイツでは人間の理性や合理性を重視する啓蒙主義（けいもうぎ）に対する反動として、いわゆるロマン主義が広がっていました。ロマン主義とは、夢や啓示（ひらめき）など意識的にコントロールできない現象に注目し、それらの根底に無意識というものの存在を仮定するという考え方です。一八世紀の物理学者のリヒテンベルクは、その『雑記帳』のなかで私たちの心には意識できない部分が存在し、その無意識の部分からさまざまな考えが生み出されるということを書き留めています。

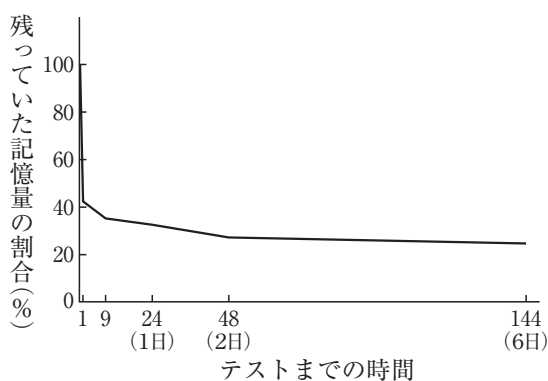


図 エビングハウスによる無意味綴りの忘却のようす (Ebbinghaus, 1885)

実は、記憶の実験的研究から忘却曲線を見出したエビングハウスも、このような無意識というガイン（h）に強く影響を受けていました。つまり、意識から消え去ったことからも無意識の記憶として残り、この無意識の記憶が私たちの意識的な思考や行動に影響を与えると考えていたのです。エビングハウスの忘却曲線（図）をよく見ると、覚えた直後から一時間程度までの間は急速に忘却が進んでいるようですが、それ以降は忘却がほとんど進まず底を打ったような状態になっています。エビングハウスは意味をもたない無意味綴り（綴り）だけではなく、意味のある材料を使った忘却曲線も調べています。たとえば、イギリスの詩人バイロンの『ドン・ジュアン』という詩の数節を使つて一八八四年（自身が三〇代の頃）にそれを暗唱する実験をおこなっています。その結果、無意味綴りの場合と同様に、時間の経過とともに急速に忘却が起

こりますが、やはり Y になることを確認しています。

それから二三年後（五〇代になって）、エビングハウスは実験以後一度も見ることがなく、内容もすっかり忘れてしまったバイロンの同じ詩を再学習し

てみました。すると二二年経^たつても、完全に暗唱できるまでの時間になお7%もの節約が見られたのです。エビングハウスはこの結果をもとに、私たちが自覚できなくとも無意識の記憶として残されているものがあると主張したのです。

無意識の記憶そのものは、その定義からわかるように意識にのぼらないため、それを直接に調べることはできません。けれども、エビングハウスのように、過去の経験を思い出しているという自覚がないにもかかわらず、その経験の影響を受けている場合、それは無意識の記憶がはたらいたと考えることができます。

(高橋雅延『記憶の深層』による。設問の都合で本文を一部改めた。)

問一 線部(a)～(h)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 本文中の空欄 A C に当てはまる語句の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オのうちから一

つ選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|-----|---|------|
| ア | A | むろん | B | しかし | C | さらに |
| イ | A | ところが | B | また | C | さらに |
| ウ | A | ところが | B | しかし | C | おそらく |
| エ | A | ところが | B | また | C | おそらく |
| オ | A | むろん | B | また | C | さらに |

問三

——線部(1)「シャクターはその冒頭にノーベル賞作家であった川端康成の『弓浦市』を引用しています」とあるが、筆者はこの小説を取り上げてどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 『弓浦市』の主人公である作家やその作者である川端康成のように、人間は完全に忘れてしまったことであつても、女性が訪ねてきて過去の話をしたり日記を見つけたりするなどといったきっかけがあればそれをすくぐに思い出すことができるということ。

イ 『弓浦市』という小説のなかで主人公の作家のもとを突然訪れてきて過去の話をする女性や記憶喪失という実体験にもとづいてそれを書いた川端康成のように、人間の記憶というものは決して完璧ではなく、間違つていたり失われてしまつたりすることがあるということ。

ウ 『弓浦市』という小説は作者である川端康成の実体験にもとづくものであるが、ノーベル賞を受賞するような作家であつても過去のできごとを忘れてしまうことがあるなどといったことからわかるように、人間は誰でも記憶を失つてしまう可能性があるということ。

エ 『弓浦市』では、主人公の作家が過去のできごとを完全に忘れてしまったことが問題を複雑にしているが、そうしたことが起こらないようにするには、川端康成の日記のように、過去の記憶を取り戻す手がかりとなるようなものを残しておくのがよいということ。

オ 『弓浦市』は作家と女性の間の記憶の食い違いを主題とした作品であるが、この作品は作者の実体験にもとづいていることからわかるように、人間の記憶は失われやすいものであるため、小説のなかの世界だけでなく現実の世界でも記憶をめぐって「不思議なできごと」が起こる可能性があるということ。

問四 本文中の空欄 X に当てはまる内容として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号

で答えなさい。

ア どのようなものをなくしたかを知っているからだ

イ 相手のことを心の底では信用していないからだ

ウ 自分のものは自分で見つけたいと思っているからだ

エ それが本当に自分のものなのかどうか自信がないからだ

オ なくしたものが簡単に見つかるはずがないと思っているからだ

問五 ——線部(2)「知人を目のまえにしながらその名前をど忘れした場合」とあるが、このような「ど忘れ」につい

ての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア このようとき、ほかの名前が心に浮かんでくるのは、その知人の名前を完全に忘れてしまったからであつて、それを思い出すのはほとんど不可能である。

イ このようとき、ほかの名前が心に浮かんでくるのは、似たような名前の知人がほかにもいるからであつて、その知人の名前を忘れてしまったわけではない。

ウ このようとき、ほかの名前が心に浮かんできても、その正誤を判断することができるのであれば、その知人の名前を完全には忘れていないことになる。

エ このようとき、ほかの名前が心に浮かんできても、そのあとすぐに知人の名前を思い出すことができたのなら、その人物の記憶力はまだそれほど衰えていないことになる。

オ このようとき、ほかの名前が心に浮かんできてもそれが違うということしかわからず、いつまでたっても知人の名前を思い出せないときは、その知人の名前を完全に忘れてしまったことになる。

問六

——線部(3)「イギリスの詩人バイロンの『ドン・ジュアン』という詩の数節を使って一八八四年(自身が三〇代の頃)にそれを暗唱する実験をおこなっています」とあるが、この詩を使った実験についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア この詩を使った二回の実験では、一回目の実験から二二年という長い時間が経過しても詩を完全に暗唱することができたが、エビングハウスは、そうしたことができたのは、バイロンの『ドン・ジュアン』のように有名な詩は人間の記憶に残りやすいからだ」と主張した。

イ この詩を使った二回の実験では、三〇代のときよりも五〇代のほうが短時間で詩を暗唱することができたが、この実験結果からエビングハウスは、人間の記憶力は年齢とともに低下するという従来の考え方が誤りであることを証明した。

ウ この詩を使った二回の実験では、一回目よりも二回目のほうが詩を効率的に暗唱することができたが、エビングハウスは、そうした結果になったのは、人間には自分では自覚することのできない記憶が存在するからだと考えた。

エ この詩を使った二回の実験では、エビングハウスが自分自身で詩を暗唱したが、二回の実験をとおしてエビングハウスは、世の中には自分のように物事を記憶することが得意な人間とそうではない人間が存在するということを見出した。

オ この詩を使った二回の実験では、一回目よりも二回目のほうが詩を簡単に暗唱することができたが、そうしたことができた理由についてエビングハウスは、自分は「詩の内容」は完全に忘れてしまっていたが、「詩の暗唱の仕方」を覚えていたからだと考えた。

問七

本文中の空欄

Y

に当てはまる言葉を、本文中から十字で抜き出しなさい。

問八

本文の内容に合致するものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 人間は何かを忘れてしまっても、ある程度の時間をかければそれを思い出すことができるが、そのようなことができないのは、人間は過去に経験した全てのことを無意識の記憶という形で残っていて、一時的に「忘れ」をして思い出せないようなことはあっても、それを完全に忘れてしまうことはないからだと考えられる。

イ 人間は何かをなくしたり忘れたりしても、銀貨をなくした女や知人の名前を忘れてしまった人のように、すぐにそれを見つかったり思い出したりすることができるが、そのようなことができるのは、ふだんは人間の思考や行動に影響を与えることのない無意識の記憶がはたらいたことによるものだと考えられる。

ウ 人間は何かを忘れてしまっても、たいていの場合、それを思い出すことができるが、そのようなことができないのは、あることがらを完全に忘れてしまったとしても、ほかの誰かが覚えていたり、川端康成が書いていた日記のようなものが残っていたりして、そうしたものを手がかりとして記憶を取り戻すことができるからだと考えられる。

エ 人間が何かを忘れてしまったとき、すぐに思い出せることとすぐには思い出せないことがあるが、記憶を思い出すのにそのような差が生じるのは、エビングハウスの忘却曲線からもわかるように、人間の記憶にはすぐに忘れてしまう短期的な記憶と決して忘れることのない無意識の記憶という二種類の記憶があるからだと考えられる。

オ 人間は何かをなくしたり忘れたりしたとき、それを探し求めたり見つかったものを「それではない」などと判断したりすることがあるが、そのような行動や判断ができるのは、その根拠となるものが無意識の記憶として存在しているからであって、そうした無意識の記憶は人間の思考や行動にさまざまな影響を与えていると考えられる。

2

次の各問いに答えなさい。

問一

①～④の [] に適語を入れ、ことわざ・慣用句を完成させたい。最も適切なものを、後の語群のア～クのうちから、それぞれ一つずつ選び、符号で答えなさい（同じ符号は二度使わないこと）。

① 明暗を []

② 出端を []

③ 逆鱗に []

④ 太鼓判を []

語群

- ア 触れる
- イ 遮る
- ウ 捺す
- エ 備える
- オ 合わせる
- カ 分ける
- キ 詰める
- ク くじく

問二

①～③の [] に適語を入れ、四字熟語を完成させたい。最も適切なものを、次の各群のア～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、符号で答えなさい。

① [] 人未踏

ア 全 イ 前 ウ 善 エ 漸 オ 然

② 刻苦勉 []

ア 礼 イ 令 ウ 例 エ 靈 オ 励

③ 温厚 [] 実

ア 徳 イ 得 ウ 特 エ 篤 オ 督

問三 「考え方や行動が何事にもとらわれず自由である」という意味で用いられるものを、次のア～オのうちから一つ

選び、符号で答えなさい。

- ア 馬耳東風 イ 満身創痕 ウ 融通無碍 エ 杓子定規 オ 傲岸不遜

問四 「師よりもその弟子のほうが優れている」という意味で用いられるものを、次のア～オのうちから一つ選び、符

号で答えなさい。

- ア 木に縁りて魚を求む イ 庇を貸して母屋を取られる ウ 雨垂れ石を穿つ
エ 虎の威を借る狐 オ 青は藍より出でて藍より青し

問五 二つがどちらも谷崎潤一郎の作品であるものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

- ア 細雪 破戒
イ 春琴抄 陰翳礼讃
ウ 田舎教師 お目出たき人
エ 暗夜行路 蓼喰ふ虫
オ 阿部一族 カインの末裔

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1) タクシーが走り出すと、遼^{りょう}賀は窓の外の景色に目を向けた。時間はちょうど正午を過ぎたところで、OLやサラリーマンがランチを取る場所を求めて財布片手に^①闊^{かっ}歩^ぽしている。風が強いのだろう。女性たちの長い髪が風になびいていた。ありきたりのなんでもない光景を見ると、苦く酸っぱいものが胃の中からせり上がってきそうになる。

胃の調子が悪いなど感じ始めたのは、もう半年ほど前のことだろうか。だが悪いと言っても時々痛むというくらいで、市販の胃腸薬を飲めばおさまる程度の痛みだった。

それがこのひと月ほど前から薬を飲んでも痛みが消えなくなった。眠っている時も自分の呻^{うめ}き声で目が覚める。気がつけば鳩尾^{みぞおち}を両手で押さえ込み、布団の中で小さく丸まっているということが連日続いた。胃袋を錐^{きり}で突かれたような、経験したことのない強い痛みを感じるようになって、さすがにこれはまずいと思い近所の内科クリニックを受診したのだ。

クリニックではおそらくストレスからくるものだろう、と鎮痛剤^(a)をシヨホウ^(b)された。だが念のために胃カメラの検査を勧められ、紹介状を持ってこの大病院に来たのが一週間前のことだ。受診した翌日には検査を受け、今日はその時に採取した組織診の結果を聞きに来たのだが……。

車が赤信号で止まり、目の前の横断歩道を大勢の人が渡っている姿を見ると、⁽²⁾松原の言葉が暗く蘇^{よみがえ}る。
悪性^(c)でした。悪性腫瘍^(c)です。精密検査を受けていただきたいと思っていて、できれば明日にでも入院を――。

大病院で医者をやっていたら、がん患者なんて珍しくもないだろう。それは十分にわかっている。それでも、あのいきなりの告知はあまりにも非情ではないだろうか。どう告げられても悪性は悪性だが、でももう少し違う言い方があったんじゃないのか。それに明日入院しろというのも無茶な話だ。こっちは定年退職して⁽²⁾隠居⁽²⁾している身じゃないのだ。仕事の引き継ぎもしないまま入院なんてできるわけがない。

怒りをぶつける相手が他にいないのでひとしきり松原を恨んだ後、それは違うぞ、と自分に言い聞かせる。がんの告

知をする直前に見せた、松原の表情。あの医者も悪い結果の告知をしたかったわけではないのだ。あの人はなにも悪くない。自分が病気になるたのは、誰かのせいではない。

「お客さん、そろそろ五反田駅ごたんだですけど……。ここから先の道順、³⁾教えてもらえますか」

いつしかシートにもたれて、目を閉じ黙り込んでいた。そんな遼賀に気を遣ってか、運転手は駅に着くまでいつさい話しかけてこなかった。顔を上げて窓の外を見れば、知った風景が目飛び込んでくる。

「あ、ここがいいです。降ります」

ダウンジャケットの袖を両目に強く押し当て、^{まぶた}瞼の熱を吸い取る。ずっと泣くのをガマンしているせいか頬が火照り、目の奥が熱かった。

遼賀が財布から五千円札を抜き出し運転手に渡すと、

「⁴⁾元気出しなさいよ」

釣銭を差し出ししながら、運転手が小声で言ってきた。はっとして、車に乗り込んで初めて運転手と目を合わせる。

「病院で客待ちしているとね、おたくみたいなお客さんを時々乗せますよ」

運転手の脂も水気もないかさかさとした指の先が、遼賀の手のひらをかすめる。

「事情はよくわかりませんがね、元気出してください。ご乗車ありがとうございます。お気をつけて」

たったそれだけの声かけだったが、言葉以上の気持ちをもたらした気になり、丸まった背を伸ばすくらい力は戻った。

⁵⁾遼賀がイタリアンレストラン「トラモンテ」で働くようになって、今年で十三年目になる。

もともとは地元の岡山で就職するつもりで、高校を卒業してからは観光関係の専門学校に二年間通った。だが企業や公社を回った就職活動は思うようにいかず、結局、地元にも工場がある食品メーカーで働くことを決めた。自ら選んだというより、その会社しか内定をとれなかったもので、それはそれで運命だと受け入れたのだ。

ただその食品メーカーへ就職してすぐに、東京勤務の内示が出た。できれば地元に残りたかった遼賀にとっては

ショックだったのだが、それも運命。もしかしたら都会で新しいことが待っているかもしれないと、自分を納得させた。会社はピザやパスタの^(e)レイトウ食品を製造販売する企業だった。入社前に熟読した会社案内のパンフレットには、マーケティング部やイタリアに食材を買い付けに行く輸入部などのことも書かれていて、東京で働くのならそうした部門で^(f)カツヤクしたいとも考えていた。その願いが叶^{かな}った時のために、イタリア語の勉強をしていたこともある。だが配属されたのは会社の商品を使った直営レストラン。レストランは都内に四店舗あり、これまで新宿店、池袋店と回り、この五反田店は三店舗目になる。店のコンセプトやメニューの内容に多少違いはあるけれど、業務内容はどの店もほとんど変わりはない。店長の遼賀が主にすべきことは、毎月会社が提示してくる売り上げ目標の数字に一元でも近づける、アルバイトを効率的に回して人件費を削る、この二点だ。

入社して五年目くらいまでは、これが本当に自分のやりたいことだろうか、迷いもあった。だが三十を過ぎた頃からは、せっかく店を任されているのだから、トラモントを故郷の海のように、光ある穏やかな空間にすると覚悟を決めた。覚悟を決めた、のに……。

「あ、すみません」

地面ばかり見て歩いていたせいで、サラリーマン風の男性とぶつかりそうになった。ビジネスコートを着込んだ男性は「失礼」と口にし、足早に通り過ぎていく。その迷いのない足取りに、^(g)羨望を通り越し、^(h)萎縮した。自分は今からどうなってしまうのだろう。⁽⁶⁾入院から退院までの間、仕事はどれくらい休めばいいのか。職場復帰はすぐにできるのだろうか。そもそも職場は、休ませてくれるのか。^(h)解雇だと言われやしないか。

有給休暇の残り日数を指折り数えていると、雑居ビルの一階に入る店舗が見えてきた。白い看板に青色のアルファベットで「tramoto」と書かれている。トラモントは「夕焼け」という意味で、イタリア語を習っていた時に初めて辞書で調べた単語だ。

店の前まで来ると、職員用の出入り口がある雑居ビルの裏側に回る。表から見ると真っ白な外壁も、裏に回るとかなり黄ばんでいる。裏口のドアも錆びついていてドアノブがぐらぐらと取れそうになっていた。そうだ、このドアノブ、

ビルの管理人に言って修理してもらわないとな……。やらなければいけない雑用をひとつひとつ思い出しながらドアを開けると、遼賀の出勤を待ち構えていたのか、アルバイトの高那裕也たかなゆうやが青白い顔をして走り寄ってきた。

（藤岡陽子『きのうのオレンジ』による。設問の都合で本文を一部改めた。）

問一 線部(a)～(h)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに改めなさい。

問二 線部①～③のそれぞれの言葉の本文中での意味とほぼ同じ意味の言葉として最も適切なものを、次の各群

のA～オのうちから、それぞれ一つずつ選び、符号で答えなさい。

① 闊歩している

A 静かに歩いている I 大股で歩いている U うろろしている

E のんびりと歩いている O あちこち歩き回っている

② 隠居している

A 世の中から遠ざかっている I ぼんやりとしている U 疲れ果てて動けなくなっている

E 将来に絶望している O 嫌なことから逃げている

③ 萎縮した

A 嫉妬した I 尊敬した U 腹を立てた

E 気後れした O あきれ果てた

問三

——線部(1)「タクシーが走り出すと、遼賀は窓の外の景色に目を向けた」とあるが、タクシーで勤務先へと向かっている遼賀やタクシーの運転手の様子や心情についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 突然がんを告知され気持ちの整理ができていなかった遼賀は、見慣れた光景を眺めながら今後のことについて一人で静かに考えたかったにもかかわらず、そうした乗客の気持ちを察することのできない運転手の無神経な態度に辟易^{へきえき}していた。

イ がんの告知を受けたうえに医者からも冷たい対応をされてやりきれない気持ちになり、誰でもかまわないので話を聞いてほしいと思っていた遼賀は、タクシーに乗り込むと窓の外の景色に目を向けながら運転手に話しかける機会をうかがっていた。

ウ 検査結果に驚き、気分が悪くなってしまった遼賀は、ふつうの乗客とは明らかに様子が違っていたため遼賀を乗せてすぐにそのことに気づいた運転手は、目的地に着くまでの間、過去のできごとを話すことをとおして遼賀を元気づけようとした。

エ 窓の外の景色を眺めている遼賀は何も考えることができなほど落ち込んでいたが、そうした気持ちを表に出さないようにしていたため、運転手も遼賀の気持ちに気づかず、ふだんと同じように乗客である遼賀に接していた。

オ 半年ほど前から続いていた体調不良に関する検査結果を聞いてショックを受けた遼賀は、泣き出したような気持ちになっていたが、そうした気配を察した運転手は遼賀に何も話しかけることなく目的地へと向かっていった。

問四

——線部(2)「松原の言葉が暗く蘇る」とあるが、医者という言葉を読み出している遼賀についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 医者の告知を聞いた遼賀はひどく腹を立ててしまったが、冷静になって考えてみると医者は自分のことを心の底から心配してくれていたということに気がつき、そうした医者に対してぞんざいな態度を取ってしまったことを深く反省していた。

イ がんという深刻な病であるにもかかわらず医者が事務的な口調で告知をしたことに遼賀は強い不満を感じたが、患者にとっては重大なことでも医者にとっては他人事ひとごとで珍しくもないことなのだと思えたと気がつく、そうした対応をされても仕方がないと納得した。

ウ 医者の告知の仕方が患者に対する配慮に欠けているように思った遼賀は憤りを感じていたが、しばらくすると、このようなことになったのは誰かのせいではなく、医者に対してそうした感情を抱くのは間違っていると自分自身に言い聞かせようとした。

エ 医者が患者である自分を責めるような一方的な告知をしてきたことに対して遼賀は、初めは不快感を覚えたが、医者から言われたように病気になる責任は全て自分自身にあるのだから、そうした口の利き方をされるのは当然だと思ふようになっていった。

オ 医者の冷たい対応に怒りにも似た感情を抱いた遼賀は、医者に冷たさを感じたのは自分の勘違いだったのかもしれないと考え直してみたものの、やはり患者の気持ちに寄り添おうとしていなかったことを確信し、医者に対してますます怒りや不快感を募らせた。

問五

——線部(3)「教えてもらえますか」とあるが、この部分の「か」の意味用法と同じものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア その本を貸していただけませんか。

イ その仕事はあなたか私がやるしかない。

ウ いつまでも嘆いていたらだめじゃないか。

エ 日が暮れる前にそろそろ出発しようか。

オ この雨では列車が遅れるのは明らかだ。

問六

——線部(4)「元気出さないよ」とあるが、運転手からこのような言葉をかけられた遼賀の様子や心情についての説明として最も適切なものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア がんを告知されて絶望し、自暴自棄になっていた遼賀は、自分を励ます運転手の力強い言葉に元気づけられたような気分になったが、それも長くは続かず、将来のことを考えてますます絶望的な気持ちになった。

イ 突然のがんの告知にショックを受け泣き出したような気持ちになっていた遼賀は、運転手の何気ないひと

言に勇気づけられ、こんなときこそしっかりしなければとつになく引き締まった気持ちになることができた。

ウ 医者からがんであることを告知され、茫然自失の状態であった遼賀は、これまで遼賀と似たような様子の客と何度も接してきた運転手の遼賀を気遣う言葉によって僅かながらも救われたような気持ちになった。

エ 自分ががんになったことを未だに信じることができずにいた遼賀は、世の中には自分とよく似た境遇の人がたくさんいるという話を運転手から聞くと、自分も現実を受け入れ、病と闘っていかねばならないと決心した。

オ 自分ががんという重い病に冒されていることを知ったことで何も考えることができなくなり、ぼんやりしていた遼賀は、自分を叱咤激励する運転手の言葉を聞いて我に返り、それまでの自分の弱々しい態度を恥じて反省した。

問七

——線部(5)「遼賀がイタリアンレストラン『トラモント』で働くようになって、今年で十三年目になる」とあるが、トラモントで十年以上働いてきた遼賀は、自分が働いているこの店をどのような場所にしたいと考えていたか。そのことがよくわかる言葉を本文中から十八字で抜き出さない。

問八

——線部(6)「入院から退院までの間、仕事はどれくらい休めばいいのか」とあるが、医者からすぐに入院するように言われた遼賀は、入院する前に何をしなければならぬと考えていたか。その内容を次のようにまとめたとき、に当てはまる言葉を本文中から七字で抜き出さない。

医者からすぐに入院するように言われた遼賀は、入院する前に少なくともを考えていた。

問九

本文の内容に合致するものを、次のア～オのうちから一つ選び、符号で答えなさい。

ア 人間が日常生活を送るなかではさまざまな問題が生じるが、遼賀は、就職活動がうまくいかなかったり、が
んを告知されたりするなどといった大きな問題に直面しても、一般的な人たちとは違って悲観的になることは
なく、「運命だ」などといったように物事を割り切つて考え、前向きに生きていくことができる性格の人間で
ある。

イ 遼賀は学生の頃から物事を深く考えることが苦手で、自分の意見や考えがしっかりと固まっていないため、
東京勤務の内示やレストランへの配属などのように、自分が嫌だと思つたことでもそれを拒否することができ
ず、他人が決定したことや周囲の状況に簡単に流されてしまうような主体性のない性格の人間である。

ウ 地元で働きたいと思つていたにもかかわらず東京勤務を命じられるとすぐにそれを受け入れてしまうなどと
いったように、遼賀は、意に沿わないことがあつた時になんとかして初志貫徹しようとするのではなく、それ
は「運命だ」などと言つて現実から逃避し、仕事にも真面目に取り組もうとしない無気力な性格の人間である。
エ 就職先や配属先などが希望とは違つていても、それを「運命だ」などと言つて納得しようとするように、遼
賀は、物事が自分の思いどおりにならなくても、いつまでも嘆いたり腹を立てたりしているのではなく、自分
の気持ちを少しでも前向きなものに切り替え、現実を受け入れていこうとする性格の人間である。

オ 世の中には自分の都合を優先させる人間と、自分ではなく他者の都合を優先させる人間が存在するが、遼賀
は、大学病院の松原のような自己中心的な人間ではなく、勤務地や配属先についての会社からの一方的な決定
にも素直に従うなどといったように、自分よりも自分以外の都合を優先させる利他的な性格の人間である。

〈問題終わり〉

